

# 英語前置詞 on の迷惑・不利益を表す用法に関する分析

松村 大寿

## 1. はじめに

「雨に降られた」などに見られる日本語の「迷惑受身」を対象とする研究では、これに相当する英語の表現として前置詞 on を伴う表現が併記されることがある。例えば Wierzbicka(1988: 263)は、「ジョンは妻に死なれた」に相当する表現として、“John’s wife died on him.”を挙げている。しかし、このような on の用法は迷惑受身と対比される文脈で取り上げられることはあってもその実態が詳細に論じられてこなかったように思われる。そこで本発表は、迷惑・不利益を被る対象を標示する on について、その意味的動機付けと文脈依存性を論じた。なお本発表では、前置詞 on の以上のような意義を日本語の「迷惑受身」という呼称に倣って〈迷惑〉義と呼ぶ。

## 2. on の〈迷惑〉義の意味的動機付けについて

on の〈迷惑〉義が他の語義からどのように拡張したのかについては、Lindstromberg(1997)<sup>1)</sup>、『英語多義ネットワーク辞典』、Okuno(2014)において既に検討されているが、統一的な見解には至っていない。そこで本発表は、これらの先行研究に加えて OED の記述を参照し、〈迷惑〉義と他の語義との関係性について整理を行った。

まず先行研究の主張を概観する。Lindstromberg(1997)は on の意味を〈接触(contact with a surface)〉と〈方向(in the direction being faced/in the same direction as before)〉の2つに大別し、前者がメタファーに基づいて〈負担(burden)〉に拡張し、さらにそこから〈不運(misfortune)〉、本稿で言う〈迷惑〉の意義が生じたと主張している。『英語多義ネットワーク辞典』には、on の中心義は〈接触〉であり、それがメタファーに基づいて〈影響〉という意義に拡張し、そこからシネクドキに基づいて(本稿の〈迷惑〉に相当する)〈悪影響〉に拡張したという記述がある。最後に Okuno(2014)は、中心義を〈接触(contact)〉と〈支持(support)〉の2つに分け、〈支持〉から〈負担(burden)〉を経由して〈迷惑(adversely affected)〉の意義に拡張したと述べている。

さらに OED を参照すると、以下の語義群が 24 番目に立項されている。

- (1) a. Indicating the person who or thing which is affected or exploited by an action, feeling, situation, etc., or towards whom it is directed (OED)
- (2) e. colloquial. Indicating the person, etc., who is to pay, esp. for a treat of any kind (ibid.)
- (3) f. colloquial (originally Irish English). So as to inconvenience, disturb, or confound the expectations of (ibid.)

(1)は“Absence [...] has had the same effect on my Passion...”などを、(2)は“The drink is on me.”などを、そして(3)は“his cow had died on him.”などを用例として伴う語義であり、上で取り上げた〈影響〉、〈負担〉、〈迷惑〉にそれぞれ相当する。これらの中で〈影響〉義が最初に立項され、その用例の初出も初期古英語まで遡れることから、〈影響〉義は〈負担〉や〈迷惑〉を包括する地位にあると考えられる。一方、〈負担〉と〈迷惑〉の用例の初出はそれぞれ 1871 年と 1880 年であり、ほぼ同時期に〈影響〉義から枝分かれする形で成立したと言えそうだ。

以上、先行研究と OED の記述を考慮すると、〈迷惑〉義は〈影響〉義から拡張したと考えるのが妥当であり、この点で〈負担〉から〈迷惑〉への拡張説は退けられるだろう。そして『英語多義ネットワーク辞典』の提示するモデルが示すように、空間的かつ原初的な意味の〈接触〉義を中心義として、on の〈迷惑〉義の成立過程は「〈接触〉 > 〈影響〉 > 〈迷惑〉」というモデルで表すのが適切だと考えられる。

## 3. on の〈迷惑〉義の文脈依存性

日本語の迷惑受身に関して、加藤(2008)は受身文の迷惑性が推意として得られるものであり、文脈に応じて迷惑性が読み込まれたり取り消されたりすることを指摘している。ここではその分析に倣い、前置詞 on における迷惑の解釈が文脈にどれほど依存しているのかを見ていく。この検証にあたって、本発表では英語母語話者 29 名に対してアンケート調査を行った。設問には 2 種類あり、1 つは迷惑性が低い文(4)(5)の容認度と、それに迷惑性が読み込まれるような文脈を付加した場合の容認度をそれぞれ尋ねたものであり、もう 1 つは、まず迷惑性が高いとされる文(7a)(8a)が容認できるかを尋ね、さらに容認できると答えた方を対象に、

迷惑や不利益の解釈とは矛盾する文脈におけるそれぞれの文の容認度を尋ねたものである。なお、前者は文脈の追加によって迷惑の意味が読み込まれるのかを、後者は文脈の追加によって迷惑の意味が取り消されるのかをそれぞれ検証するための設問である。(6)と(9)は、それぞれの設問における回答結果を示している。

- (4) Jim studies math on me.  
 (5) Mary ate ice cream on me.  
 (6)

	容認できる	適切な文脈なら容認できる	容認できない
(4)	0%	11.5%	88.5%
文脈追加後(4)	3.9%	19.2%	76.9%
(5)	0%	41.7%	58.3%
文脈追加後(5)	50.0%	20.8%	29.2%

- (7) a. It rained on me yesterday.  
 b. It rained on me yesterday. After the warm rain in the summer, I felt completely refreshed.  
 (8) a. My father has died on me.  
 b. My father has died on me. It has given me a sense of liberation because he maltreated me.

(9)

	容認できる	容認できない
(7a)	93.1%(27人)	6.9%(2人)
(7b)	77.8%(21人)	22.2%(6人)
(8a)	65.5%(19人)	35.5%(10人)
(8b)	63.2%(12人)	36.8%(7人)

(6)や(9)の結果から、on が持つ迷惑の意味は文脈に依存しており、日本語の迷惑受身と対比されてきた(7a)や(8a)のような表現においても完全に習慣化されているわけではないと言えそうだ。今回得られたデータは調査対象の母集団が小さいため確度の高いものではないが、迷惑の解釈を導出する文脈やその解釈とは矛盾する文脈を付加した場合に、迷惑の解釈が現れたり取り消されたりする可能性があることがわかった。

#### 4. 終わりに

以上、on の〈迷惑〉義の動機づけと文脈依存性を検討したが、今後探究していくべき課題はまだ残されている。紙幅の都合上本発表の内容に直接関連する点にのみ言及するが、たとえば、(4)(5)において時制の違いや事態に関する百科事典的知識の違いが容認度と関係していたり、(7b)において on が〈接触〉の意味で解釈されたために容認度が高くなっていたりする可能性があるため、今後は設問で取り上げる用例のバリエーションを増やして調査を行い、on の迷惑用法の実態を追究したい。

#### 参考文献

- 加藤重広 (2008). 「日本語の受動構文のとらえ方」. 『日本語受動構文の構造的意味と推意に関する語用論的原理の記述的研究』, 9-25.  
 Lindstromberg, Seth (1997). *English Preposition explained*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.  
 \_\_\_\_ (2010). *English Preposition explained: Revised Edition*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.  
 Okuno, Tadanori (2014). “Cognitive-Linguistic Analysis of the English Preposition ON”. Department of English Education, Faculty of Education, Hirosaki University, *Bulletin of the Faculty of Education*, 112, 71-79.  
 瀬戸賢一 (編) (2007). 『英語多義ネットワーク辞典』. 東京: 小学館.  
 Wierzbicka, Anna (1988). *The Semantics of Grammar*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

<sup>i</sup> Lindstromberg(1997)の改訂版として Lindstromberg(2010)が存在するが、こちらには on の迷惑用法に関する分析がなかったため、本発表では Lindstromberg(1997)を参照した。